

平成 26 年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属池田中学校

1 附属池田中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属池田中学校

(2) 所在地

大阪府池田市緑丘 1-5-1

(3) 学級数・収容定員

12 学級(1 学年 4 学級) 収容人数 480 人(1 学級 40 人)

(4) 幼児・児童・生徒数

480 人(男子 240 人・女子 240 人) ※平成 26 年 12 月 1 日 現在

(5) 教職員数

校長(併任) 1 人 副校長 1 人 主幹教諭 1 人 教諭 20 人(うち、臨時的雇用 1 人
育児休業 2 人) 非常勤講師 7 人

事務職員 5 人(専任 1 人 事務補佐員 1 人 臨時的事務員 3 人) 臨時的用務員 2 人

2 附属池田中学校の教育目標

人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を
培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満
ちた生徒の育成

3 附属池田中学校の使命

(1) 教員養成大学である大阪教育大学の研究校である。

(2) 大阪教育大学の学生の教育実習校である。

(3) 現職教育への奉仕をする学校である。

(4) 常に新しい教育理念と中正な教育的信念をもち、望ましい環境の内に個性を生かしな
がら、真の中等普通教育を実施することを目指している。

(5) 一般生徒、国際枠生徒(帰国生徒、在日外国籍生徒)、学校災害特別研究生徒からなる
混合学級で授業を行い、新しい教育の開発を目指している。

4 附属池田中学校の教育方針

(1) 自主・自律につながる学びの基礎・基本の確立

教員と生徒、生徒相互のよりよい関係を確立し、自由な校風の中、自主・自律の精
神を培い、自ら求め学ぼうとする態度の育成を目指している。

(2) 確かな学力の育成

基礎的・基本的事項を定着させるとともに、体験的、問題解決的な学習の充実をは
かり、学ぶ意欲や思考力まで含めた「確かな学力」の育成を目指している。

(3) 自他の文化の理解・共生の心の涵養

国際社会の中で、異なる文化を理解し、共に生きてゆける豊かな国際感覚をもった生徒の育成を目指している。

5 附属池田中学校の学校教育計画及び本年度の重点目標

(1) 共同研究「つながり、かさなり、ひろがる授業 ～「知」を鍛える授業展開～」の推進
および各自の研究力の向上

◎小学校・高校とのカリキュラムの連続性を意識した共同研究の推進

◎各教科・領域における評価(評価基準・評価規準)研究及び積極的な研究の継続・推進

(2) 授業力の向上

◎月1回以上の授業研究・研究協議会の充実

◎言語活動の充実、学校図書館・ICTの活用、生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり

(3) 安全・安心な学校づくり

◎ISS 認証取得に向けた学校安全組織・生徒会組織の確立、PTA 等の関係機関との連携強化

◎安全管理の推進

◎安全教育の充実

(4) 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進

◎自己肯定感を育み、互いを尊重しあう人間関係の育成

◎異なる文化や価値観を認め合い、自他ともに大切にする態度の育成

(5) 生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応

◎生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施

◎生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり

◎いじめ・不登校のない学校づくり

(6) 教育実習の充実

◎教職を望む学生の資質の向上

(7) 適切な組織運営、開かれた学校づくり、保護者・地域との連携

◎機能的・機動的な組織運営

◎開かれた学校づくりの推進

◎保護者・地域との連携

6 附属池田中学校 平成26年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果(その1)

| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|------|--------------|---------|-----------|
| A | 高いレベルで達成できた | A | とても適切である |
| B | 達成できた | B | おおむね適切である |
| C | 一部達成できなかった | C | あまり適切でない |
| D | ほとんど達成できなかった | D | 適切でない |
| | | E | 判定できない |

| | | |
|--------|---|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 1. 共同研究「つながり、かさなり、ひろがる授業」の推進および各自の研究力の向上 | |

| 本年度の重点目標(評価項目) | 具体的な取組内容(評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を踏まえた改善策 | |
|-----------------------------------|---|---|--|----|---|----|--|----|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)小学校・高校とのカリキュラムの連続性を意識した共同研究の推進 | 各教科において、小学校教員・高校教員と連携を図り、カリキュラムづくり・授業づくりを行う。また、研究協議会の充実を図る。 | ・小中高連携の大枠は整い、3校種そろって研究発表会をするスタイルは確立できた。しかし、連携の進み具合が教科・領域によって異なっている。 | ・教科領域「代表者会」でなく、教科領域全教員が参加できるようにする。 ・連携のカギを握るのは小・高ともに関わりあう中学校の教員にあるということからも、事務局の仕事などで小学校に依存がちな部分をできるだけ中学校でもこなすようにする。 | B | 小中高の連携、特に、高共連携を図っているところは素晴らしい。連携の意識の温度差はどこに原因があるのか。 | B | 教員全員が参加する教科領域会議の充実を図り、意見等の共有化を促進する。 | 研究 |
| (2)各教科・領域における積極的な研究の継続・推進 | ①科学研究費助成事業(奨励研究)に10人以上応募し、30%以上の採択率を達成する。 ②全教員が年1回以上、研修会に参加し、成果報告会における意見交流を活性化させる。 | ・今年度の応募人数と採択率が不明なので、正確に達成状況を判断できないが、募集の時期からして十分な内容のものを作成するのが難しいように感じる。 ・来年度転出が決まっている教員のモチベーションが低い。 | ・募集の時期が2学期の忙しい時期に当たるので、1学期のうちからアナウンスをし、昨年度の募集要項だけでも回すようにする(特に新年度着任された先生にも周知徹底できるように)。 | B | ここ数年、10件を超える応募が続いていることは研究校として認められる。昨年度の採択率50%を今後も目標としていただきたい。 | B | 1学期の早い時期からこの事業の説明と応募の促しを行う。また、大学教員との連携をさらに図り、助言をもらう。 | 研究 |
| | | ・参加する教員は積極的に参加しているが、全員とまではいかなかった。また報告をきちんとしてくれる教員は2、3人程度で意見交流そのものが成立していない。 | ・成果報告の時間を職員会議や研究会で強制的にでも設ける。誰がいつこの研修会に出席したのかを明らかにする。 | C | 研修報告は責務ではないのか。時間的に難しいのであれば、ペーパーでの報告も可にしてはどうか。 | C | 研修の成果の報告は全体での共有化を図るために重要であるので、年度当初から計画的に実施する。 | 研究 |

| | | |
|--------|---|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 2. 授業力の向上 | |

| 本年度の重点目標(評価項目) | 具体的な取組内容(評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を踏まえた改善策 | |
|-----------------------------|---|---|---|----|---|----|--|----|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)各教科・領域の本質となる「知」を鍛える授業の実践 | 月1回以上の研究授業の開催、全教員が年1回以上研究授業を実施する。また、研究授業後の協議内容の質を高める。 | ・行事などもあり、月1回の実施は困難であった。年8回実施したが、出張などが重なり、十分な人数で協議ができないうちもあった。 ・協議内容の質にむらがある。決まった人しか発言せず、「この先生が発言してくれるはずだ」という雰囲気を感じられる。 | ・定期授業研究会の回数を減らすか無くすか。校内授業研・公開授業に集中できるように体制に変える。 ・協議会における感想のみの発言は司会で阻止する。ベテランはあえて最初から発言しないよう我慢する。授業者が討議会で話し合っただけの意見を提案し、また、司会もその趣旨に沿って討議会が進むようマネジメントする。 | C | 協議への全員参加は(発言は)司会者が促すべきではないのか。発言しにくい要素があるのか。 | C | 授業研や校内研を精選し、全体の回数を減らす。また、それぞれにテーマを設け、意見をまとめやすい(出しやすい)研究会にする。 | 研究 |
| (2)生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり | ①生徒の学校評価アンケートから、85%以上の生徒に授業に関して満足感をもたせる。 ②電子黒板(ICT)を積極的に活用した授業を進め、その成果を発信する。 | ・授業内容に対する満足度は90%を超えるが、成績のつけ方については85%を下回った。 | ・年度初めと学期末に、教科の授業内での評価のつけ方とC規準(基準)について説明する時間を確保する。シラバスのひな形を見直し、より子どもが評価方法をイメージできるような形態、表現に改善する。 | B | 授業に対する満足感が90%を上回っていることは素晴らしい。ちなみに、池田市は中学校で51.1%である。 | A | 評価Cの生徒に対する具体的な手立てをもつこと。そして、何ができたかA,Bなのかを生徒により適切に説明する。 | 研究 |
| | | ・積極的に活用しているが、その分故障や不具合を訴えることも多い。 ・成果の発信ができる教員に限られている | ・ICT機器の管理を含めると、情報管理主任の仕事がここ数年で倍増している。きちんと専任の教諭によって管理し、研究主任や生指主事との兼任を無くす。 | B | ICTの活用が図られていることに感心する。 | A | ICT機器(周辺機器も含めて)の使用上のルール、管理を徹底する。 | 研究 |

| | | |
|--------|---|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 3. 安全・安心な学校づくり | |

| 本年度の重点目標(評価項目) | 具体的な取組内容(評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を踏まえた改善策 | |
|---|---|--|--|----|---|----|---|----|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)ISS認証取得に向けた学校安全組織・生徒会組織の確立、PTA等の関係機関との連携強化 | 学校保健安全委員会による、学期に1回以上の協議、生徒会・保護者等と連携した取り組みの充実を図る。 | 学校保健安全委員会の中核である、生徒指導委員会を中心としながら、学校保健安全委員会にてISS認証に向けて取り組む事ができた。併せて、PTA安全委員会を中心に保護者との学校安全に向けた取り組みを行う事ができた。また、生徒に関しては生徒会を中心に新しく設立された安全委員会、衛生委員会と連携しながらISSの取り組みを行い、認証を受けることができた。 | 生徒会組織の一部として新たに安全委員会が設立され、学校安全に向けた発信がなされた。また、ISSの認証に向けて従来よりもPTAと密接に連携を図り、安全に向けた態勢を一層強化する。 | B | 日本の中学校ではじめてのISS認証取得はとても素晴らしい。今後取組が低迷しないようにお願いしたい。 | A | 次年度は、特に安全教育の系統的なカリキュラムづくりの構築を図る。また、Safety Promotion Schoolにも認証されたので、学校安全の普及にも努める。 | 安全 |
| (2)安全管理の推進 | 学校安全マニュアルの活用、実際に即した年2回以上の防犯訓練、年2回以上の防災訓練の実施と評価の充実を図る。 | 学校安全マニュアルに基づく防災・防犯・ブール事故対応訓練を実施することができた。また、訓練については、防犯訓練を生徒対象・教職員対象計3改実施し、防災訓練については地震対応と火災対応の計2回を実施した。また、実施後十分な討議を行い、訓練について評価し改善点を見いだすことができた。 | 教職員対象不審者防犯訓練を実施後、同じ設定での不審者対応訓練を行い、より具体的な訓練を行う。 | A | 不測の事態に対応する訓練を継続して実施していることはよいことである。先生たちの姿は生徒には映っていますか。 | A | 様々な場面を設定した訓練を今後も継続して行い、意識とスキルの上昇を図る。 | 安全 |
| (3)安全教育の充実 | 小学校・高校と連携を図った系統的な安全学習の策定・実施・評価の充実を図る。 | 小・高と連携し12年間を見通した安全学習の研究を行い、授業提案等から安全学習の策定・実施・評価をはかることができた。 | 自助・共助・公助という視点も交えて、授業構築を意識し、より外部へ向かっていく方向性を持った安全学習の検討を行う。 | A | 安全学習の12年間を見据えたカリキュラムがあることが大変素晴らしい。 | A | 外部に向かって発信できる、より系統性のある安全教育カリキュラムを策定していく。 | 安全 |

6 附属池田中学校 平成26年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果(その2)

| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|------|--------------|---------|-----------|
| A | 高いレベルで達成できた | A | とても適切である |
| B | 達成できた | B | おおむね適切である |
| C | 一部達成できなかった | C | あまり適切でない |
| D | ほとんど達成できなかった | D | 適切でない |
| | | E | 判定できない |

| | | |
|--------|--|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 4. 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進 | |

| 本年度の重点目標 (評価項目) | 具体的な取組内容 (評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を 踏まえた改善策 | |
|------------------------------------|--|---|---|----|--|----|--|----|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)自己肯定感を育み、互いを尊重しあう人間関係の育成 | ①生徒の学校評価アンケートから、90%以上の生徒に学校生活に関して満足感をもたせる。また、学級や学年の活動の場において、他者と関わり、互いの考えを交流したりする場面をできる限り設ける。 | ・項目1の「楽しい学校生活が送れている」、項目4の「自分の考えをまとめたり、話し合ったり、発表する授業がよくある。」、項目9の「附中では、授業や文化祭などの活動の中で、国際校生との経験が生かされる場面がある。」で90%を超えていて、ある一定満足感を感じて生活を送れていると評価される。一方、項目2の「附中は、自由な校風の中、自主・自律の精神を育て、自ら求め学ぼうとする生徒を育てようとしている。」では86%と決して低いとはいえないものの、3年間で徐々にポイントを上げてしまっている。項目1の「楽しい学校生活が送れている。」では90%以上の生徒が「当てはまる」と答えており、ある程度満足感をもって学校生活を送れていると考える。一方、項目15の「附中は、細かい校則はないが、生徒はルールをよく守っている。」では「当てはまる」が75%と90%を大きく下回っている。 | 自分の考えをまとめたり、話し合ったり、発表する授業があると感じる中で、項目2が低く、「自ら求め学ぼうとする」自主性を養う必要があると考えられる。多くの生徒は楽しく学校生活を送ることはできているが、一方でルール違反をする生徒への不満も感じられる。この不満は教師への不信感にもつながり、やがて学校生活を「楽しくない」と感じるようになる可能性があると考えられる。学校生活を送るうえでルールを守ることが必要不可欠である。生徒の心に寄り添った指導を心がけながら、生徒がルールを遵守することの大切さを実感できる機会を多くつくる必要がある。 | B | 生徒自身がルールについて考える機会が設けられているのか。生徒会の関わりはどのようなのか。 | B | 本校の校訓「自主・自律」の下、生徒会活動において、自ら課題を見つけ、自ら解決方法を模索し、全体に広げることができる取組を進めていく。 | 学年 |
| (2)異なる文化や価値観を認め合い、自他ともに大切にできる態度の育成 | ①生徒の学校評価アンケートから85%以上の生徒に国際校生との経験が生かされている実感をもたせる。 | ・学校評価アンケート結果で、「あてはまる」が90.2%であり、国際校生との経験を生かす取り組みが生徒全体に理解され、実感をもたせているといえる。 | ・今年度はISS関係で国際校生が活躍する場面があり、例年に比べて機会が多かった。来年度以降も今年度と同じくらい活躍できる場を確保することが課題である。 | A | ISS関連における国際校生との具体的な活躍内容は何か。国際校の特性を活かした取組を今後とも続けていきたい。 | A | 国際校生との異文化体験等をまわりに発信できる機会を多く設ける。 | 国際 |
| | ②真の自主・自律の確立、他者理解を深め、人としての誇りがもてる道徳教育を計画的・組織的に推進する。 | ・各学年の重点目標に沿って授業を実践できた。 ・多くの先生方に指導案作成、授業実践をしていただいた。 ・各学年で指導案検討会をおこない授業の充実に努めていただいた。 ・副読本や共有データを活用し、授業にいかすことができた。 | ・長期的な目標とは別にそれを鑑みたそれぞれの授業のねらいの明確化。 ・授業の効果の検証法。 ・道徳的価値に対する知識。 | B | 道徳教育において小中高の連携はあるのか。道徳の研究もあるようだが、その成果についてはどのようにしているのか。 | B | 道徳の教科化を踏まえた、全体計画や内容の精選、評価方法を具体的に検討・実施する。 | 道徳 |

| | | |
|--------|--|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 5. 生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応 | |

| 本年度の重点目標 (評価項目) | 具体的な取組内容 (評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を 踏まえた改善策 | |
|------------------------------|--|--|---|----|---|----|--|-----------|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施 | ①生徒の学校評価アンケートから、85%以上の生徒に教員の生徒理解に関して満足感をもたせる。また、会議の効率化を図る等の方策を教務部と連携しながら、生徒と教員が接する時間をより多くとる。 | 本年度は、85%以上の生徒について満足感を持たせることができなかった。また、会議の効率化については、学期末の出欠統計の処理について、出席簿からそのまま出力できる形とし、学期末の会議時間の削減を行う事ができた。 | 職員会議にて、生徒指導部からの方針を時間をかけて明示し、取り組みを計るよう要請し、中間期に再確認をより明確に行う。 | C | 目標の85%に到達しなかった原因について考える必要がある。また、保護者からも20%弱が満足していない。 | C | 生徒指導委員会や職員会議で情報の共有を図る。また、指導方針についての周知を徹底する。 | 生徒指導 |
| | ②共通認識・共通実践および保護者・関係諸機関と連携を図った対応を図る。 | 保護者及び生徒理解のもと、豊中市や箕面市、池田市等の関係諸機関と連携を図り、対応することができた。 | 各自治体等の関係諸機関を精査し、相談機関の選定を行い、より強化を図る。 | A | 具体的にどのような内容なのか。(口頭で具体的な内容を伝える) | B | 生徒のより望ましい成長を目指して、今までと同様、関係諸機関との連携強化を図る。 | 生徒指導 |
| (2)生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり | ①生徒指導委員会を軸に情報の共有を図り、共通した指導を実践する。 | 生徒指導委員会を軸に、情報共有を行う事ができた。また、規範意識について課題等を共有し、検討し対応することができた。 | 会議で問題提起をはかり、生指委員会全体でより深い議論を展開する。 | A | 生徒指導委員会開催の頻度は、また、情報共有の後の対応策も協議されているのか。 | B | 生徒指導委員会と学年会等の分掌との報告・連絡・相談をより緊密なものにする。 | 生徒指導 |
| | ②生徒のリーダー性・自発性を育むように生徒会の活性化を図る。 | 体育大会や文化祭、ISSの認証、各種専門委員会を中心に生徒による主体的な活動が行う事ができ、活性化を図ることができた。 | さらに、生徒主体の活動機会を増やすことで活性化を図る。 | A | 生徒が中心になって活動できる場面設定は大切である。 | A | 生徒主体の活動を具体的に企画・運営だけではなく、その評価もしっかり行わせる。 | 生徒指導 |
| (3)いじめ・不登校のない学校づくり | 「特別支援委員会」を充実させ、課題のある生徒の情報を共有し、支援プログラムを作成する。 | 課題のある生徒の情報交換、手立てについては議論を行うことができたが、支援プログラムの作成は十分に行えなかった。 | 次年度は課題のある生徒の個別の支援プログラムを作成し、全体で共有、改善を図る。 | C | 情報交換だけで終わらず、個々の生徒の具体的な対応についても議論を深めていきたい。 | C | 支援プログラムの作成のための計画をしっかりと立て、実施する。 | 生徒指導・メンタル |

| | | |
|--------|--|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 6. 教育実習の充実 | |

| 本年度の重点目標 (評価項目) | 具体的な取組内容 (評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を 踏まえた改善策 | |
|--------------------|--|---|--|----|-------------------------------------|----|---|------|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)教職を望む学生の資質の向上 | 教科指導や学級指導において指導教員を中心に個々の教育実習生の課題を把握し、各教科・実習部・管理職・大学と協力体制をとる。 | 各教員が全力で実習生と向き合ったと思う。実習生もそれによく応えてくれた。しかしながら大学への成績の提出や、実習簿の変更内容が周知できていなかった等、関係各位に迷惑をかけた点もあった。 | ・新年度頭に実習期間を再度確認する。 ・実習生の退勤時刻を原則20時とする。 ・実習簿を大学と連携をとってわかりやすいものにする。 ・成績の提出を年内にできるようにする。 | B | 日々の多忙な業務の中、多くの実習生指導はとても大変なことだと思われる。 | A | 計画的な指導計画の下、指導の質を担保しながらも、退勤時間が遅くならないよう努める。 | 教育実習 |

| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|------|--------------|---------|-----------|
| A | 高いレベルで達成できた | A | とても適切である |
| B | 達成できた | B | おおむね適切である |
| C | 一部達成できなかった | C | あまり適切でない |
| D | ほとんど達成できなかった | D | 適切でない |
| | | E | 判定できない |

| | | |
|--------|---|-----------------|
| 学校教育目標 | 人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成 | 自己点検評価を主体的に行う分掌 |
| 学校教育計画 | 7. 適切な組織運営、開かれた学校づくり、保護者・地域との連携 | |

| 本年度の重点目標 (評価項目) | 具体的な取組内容 (評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を 踏まえた改善策 | |
|--------------------|---|---|---|----|--------------------------------------|----|---|--------|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | | |
| (1)機能的・機動的な組織運営 | ①保護者の学校評価アンケートで90%以上の保護者が教育方針等に対して満足感をもつような学校運営をする。 | 保護者の学校評価アンケートで94%の保護者が教育方針に対して満足感を持っている。 | 本年度以上に、あらゆる機会に学校の方針を周知する機会をもつようにし、保護者からの意見を把握する。 | A | 保護者の満足度がこれほど高いとはとてもよい。 | A | 学校運営に関する保護者から意見を直接聞く機会を設けることを検討する。 | 運営・教務 |
| | ②ミドルリーダーが各分掌においてリーダーシップを発揮し、学校組織として報告・連絡・相談の機能を充実させる。 | ミドルリーダーが各分掌においてリーダーシップを発揮し、〈各個人→ミドルリーダー→管理職〉と、組織としての報告・連絡・相談の機能が十分機能している。 | 若手教員が増える中、次世代のミドルリーダーの育成に努める。 | A | ミドルリーダーの活用は大切であるが、大きな負担とならないよう配慮が必要。 | A | 計画的・効率的な業務の執行を図り、負担が一部に偏らないようにする。 | 運営・教務 |
| (2)開かれた学校づくりの推進 | ①学習評価等の規準や進路情報、公文書等を適切に発信する。 | 保護者集会の場を活用して、学習評価等の規準や進路情報、公文書等を適切に発信するようつとめた。しかし、保護者の中には情報が少ないとする意見もある。 | 5月の保護者集会において、例年は学年別に評価や進路についての説明をおこなってきたが、今年度は3学年を一括して説明し、学年により情報を小出しにしている印象がぬぐえるように努力した。 | B | 改善の努力がなされており、とてもよいです。 | A | 進路情報に関しては、本年度同様1,2年の保護者に対しても積極的に発信していく。 | 教務・進路 |
| | ②学校評価について、積極的に公表する。また、学校HPの充実を図る。 | 学校評価アンケートの結果をHP上で公表している。必要な情報についてHPで公表している。 | 学校HPでは生徒会とクラブ活動の生徒作成によるページを全面的に改定した。 | B | 発信のさらなる工夫を。地域に対して、地域の掲示板の活用も考えられる。 | B | 学校HPに関して、抜本的な改善が必要である。 | 教務 |
| (3)保護者・地域との連携 | ①保護者の学校評価アンケートにおいて、90%以上の保護者が授業参観や学校行事等に参加しやすいと感じるようにする。 | 91%の保護者が授業や行事に参観したり、懇談したりしやすいと回答している。しかし、3学期には機会がないため、十分な機会を保障しているとはいえない。 | 5月の授業参観・保護者集会の日程を整理し、授業参観できる時間を増やした。9月はじめに授業参観を設定し、2学期の参観できる機会を増やした。 | B | 授業等は積極的に公開するべきである。 | A | 授業参観だけではなく、様々な学校行事に積極的に参加してもらえるよう、PTAとも連携を図る。 | 教務・PTA |
| | ②PTA活動が活発になるよう学校として支援を行う。(保護者の学校評価アンケートにおいて、90%以上の保護者がPTA活動に対し満足度をもつ) | 96%の保護者が学校評価アンケートにおいて、「活発に活動している」と回答している。PTA総会・参観などの日程を整理したことで、多くの保護者に関わってもらえた。 | PTA主催の行事に職員が積極的に参加するよう促した。餅つき大会においては、生徒会やクラブ単位の参加を促し、行事の活性化に寄与した。 | B | PTAが子どもと一緒に活動している行事があるのがよい。 | A | できるだけ多くの保護者にPTA活動に協力してもらえるよう学校と連携していく。 | 教務・PTA |